

物語・説話

物語

過ぎ去りつつあった王朝社会をあこがれ、なつかしむ気持ちは強く、鎌倉時代に入ってから、宮廷社会の恋愛を題材とした物語が数多く作られたが、そのほとんどが『源氏物語』などの模倣の域にとどまっていた。擬古物語といわれるこれらの物語にかわって、戦乱と変動を続ける時代・人間を主題とした**軍記(戦記)物語・歴史物語**などが登場してくる。

【**擬古物語**】 鎌倉初期の物語評論『**無名草子**』や『**風葉和歌集**』には多数の作品の名が見られるが、現存するものはわずかである。現存する中では、『**松浦宮物語**』『**住吉物語**』『**今とりかへばや**』『**石清水物語**』などが、舞台・題材・趣向に工夫を見せている。

【**軍記物語**】 平安時代後半に書かれた『**将門記**』『**陸奥話記**』は、漢文体で、記録性の強いものであるが、素材と文体に新しい魅力があり、軍記物語の先駆とされる。

●【**保元物語**・**平治物語**】 鎌倉時代に入ると、平安末期に起こった保元の乱・平治の乱に取材した『**保元物語**』『**平治物語**』が作られる。二つの乱の勝敗を左右したのは、新興の武士階級の武力で、それは新たな武士の時代の到来を意味していた。『保元物語』では、雄々しく奮戦する敗軍の勇将**源為朝**、『平治物語』では、敗死した源義朝の愛人**常盤**とその子たちの苦難に満ちた逃避行の物語などが、印象深く描かれている。

いずれも作者は未詳だが、十三世紀半ばごろには原型が成立したと考えられている。文章は力強い和漢混交文(口P.82)である。

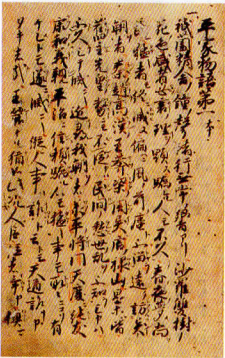
【**保元物語**】 卷中・白河殿攻め落とす事
 為朝 例の先細さしつがつて、まつさきにしすんだる志保見五郎が頸の骨を射切らんとさしあて放ちたり。志保見きつと見て矢に違はんと頸をうちふりたれども、なかははづるべき。矢坪こそ少しあがりたりけれども、甲の鉢付の板を左より右へ持につつと射ぬかれたり。まつ逆さまに落ちければ、手取の与次落ち合ひて、頸かききり、矢をもぬかずして、頸と甲を矢にて荷ひてうちかづきてぞ出で来たる。

【**口語訳**】 為朝はいつもの先細の矢をつがえて、真つ先に進んできた志保見五郎の首を射切つてしまおうとねらいを定め、矢を放った。志保見はさつと見て、矢をよけようと首を横にふつたが、どうしてはずれることがあるのか。当たり場所こそ少し上にあがったけれども、かぶとの両脇に垂れているしころの板の上から、左から右へかせるように、ずばつと首を射抜かれてしまった。真つ逆さまに馬から落ちると、手取の与次がかけて、首を切り取り、矢も抜かないまま、首とかぶとを刺さつた矢でもって肩にかついでやってきたのだった。

『平家物語』

作者未詳。十三世紀半ばごろには原型成立か。

【**内容**】 平家一門は栄華を極め、平清盛は太政大臣にまで栄達するが、専横が激しく、早くも反平家の動きが起こる。源頼政の決起にうながされた諸国の源氏は、源頼朝・木曾義仲をはじめとして次々に挙兵する。折しも清盛は熱病で病没、義仲の驚異的な進撃の前に、平家は京都を捨てて都落ちする。しかし、



『平家物語』(延慶本) 諸行無常、盛者必衰の理を説いた冒頭部分。



琵琶法師(職人尺歌合)

▼軍記物語の流れ

室町	鎌倉	平安	安
曾我物語(四世紀半ばごろまで)	源平盛衰記(三世紀末ごろ)、『平家の異本』 源平盛衰記(三世紀末ごろ)	保元物語(三世紀半ばごろ) 平治物語(三世紀半ばごろ) 平家物語(三世紀半ばごろに原型)	将門記(四世紀以後) 陸奥話記(四世紀ごろ) 軍記物語の先駆
	太平記(四世紀半ばごろ) 義経記(四世紀半ばごろ) 曾我物語(四世紀半ばごろまで)		

▼『**無名草子**』 藤原俊成、女の作とも伝えられるが、不明。建仁元年(一一三〇)ごろまでに成立か。物語・女流歌人・作家についての評論・批評を載せている。

▼『**風葉和歌集**』 藤原為家撰か。文永八年(一一三二)成立。物語の中の和歌を選んで編んだ歌集。

▼『**松浦宮物語**』 藤原定家作か。鎌倉初期成立か。失恋した弁少将が唐に渡り、恋愛や戦争を体験

する物語。夢想的で異国趣味にあふれる。

▼『**住吉物語**』 作者未詳。鎌倉初期までに成立か。継母の迫害を逃れた姫が恋人と出会い、幸福になる。代表的な継子物語。平安時代に同名の物語があり、現存本はその改作と考えられる。

▼『**今とりかへばや**』 作者未詳。鎌倉初期までに成立か。男が姫、女が若君として育てられ、成人後に男女にもどるといふ特異な恋愛物語。

▼『**石清水物語**』 作者未詳。文永八年(一一三二)ごろまでに成立か。東国武士が関白の姫を見そめるがかなわず、出家してしまうという話。武士を主人公とする点は異色。

▼『**将門記**』 作者未詳。天慶三年(八四〇)平将門の乱後に成立。東国で平将門が乱を起こしたときの模様を漢文体で記している。

▼『**陸奥話記**』 作者未詳。康平五年(一〇六三)ごろ成立。前九年の役(一〇五二)の事を記し、『将門記』とともに、のちの軍記物語の先駆である。

▼**参考** 保元の乱の印象
 保元元年七月二日、鳥羽院、ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ乱逆トイフコトハオコリテ後、武者ノ世ニナリニケルナリ。
 (慈円『愚管抄』)

▼**源頼政** 長治元年(一一四一)〜治承四年(一一五四)。平安末期の武将。宇治橋での合戦で敗死。歌人としても有名で、『詞花集』以下の勅撰集に約六十首が入集。家集『頼政集』もある。

横暴な義仲軍は人心を得ることができず、頼朝の代官源義経に敗れ、義仲は討死にする。平家は、一の谷や屋島で義経の天才的な軍略によって大敗し、ついに壇の浦で滅亡する。

このような平家一門の興亡の歴史が語られる中に、清盛の寵愛を失った祇王、高倉天皇の寵を得ながら清盛の圧迫を恐れて嵯峨野に隠れた小督、一門の滅亡後、大原に隠棲した建礼門院徳子など、女性たちの哀しい物語も織りこまれている。宗教的な無常観に基づきながらも、勇壮な合戦場面は迫力をもつて描かれ、また、死や別離を前にした人々の心情も、美しく、哀切に物語られている。

《成立・文体》 原型は十三世紀半ばごろには成立していたらしいが、琵琶法師によって「平曲」(琵琶に合わせて語られた「平家物語」として語られ、多くの語り手・読者の手を経るうちに、改訂・増補がくり返され、成長していったと考えられる。「源平盛衰記」(鎌倉末期)なども、このような過程でできた『平家物語』の異本の一つである。文章は、漢語・和語・仏教語・俗語を自由に取こんだ和漢混交文(17p.82)を基調とし、あるいはまた艶麗で叙情的な七五調の韻文調でつづられており、全体として美しく調和し、壮大な物語世界を作り上げている。軍記物語の白眉



壇の浦合戦 (平家物語絵巻)

中世文学の代表的作品で、後世、謡曲・御伽草子・浄瑠璃などに多くの素材を提供している。

『平家物語』巻九・木曾の最期

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のこわりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

『平家物語』巻九・木曾の最期

木曾殿は只一騎、栗津の松原へかけ給ふが、正月二十一日、入相ばかりの事なるに、薄氷は張つたりけり。深田ありとも知らずして、馬をざつとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てどもはたらかず。今井が行方のおぼつかなさ、振りあふぎ給へる内甲を、三浦の石田次郎為久、追つかけてよつびいてひやうふつと射る。痛手なれば、真向を馬の頭にあててうつぶし給へる所に、石田の郎等二人落ち合ふて、つひに木曾殿の頸をば取つてんげり。

〔口語訳〕(祇園精舎) インドの祇園精舎の無

常堂の鐘の音は、万物はすべて流転するという教えを響かせる。釈迦入滅の床の四隅にあった娑羅の木は白色に変じて、盛んな者も必ず衰え滅びるときがあるという理法を示す。権勢を誇っている人も、その権勢が長続きはしない。それは全く短い春の夜の夢のようなものだ。勇猛な者も結局は滅んでしまう。それは、全く風の前のちりと同じである。

(木曾の最期) 木曾殿(義仲)はたった一騎

死に場所を求めて栗津の松原に駆け入られたが、正月二十一日、夕暮れ時のことで薄氷が張っていた。深い田があるとも知らないで、馬をざつとばかり踏みこませたところ、馬の頭も見えなくなった。あふみであおつてもあおつても、打ち打つても馬は動かない。一人で防戦している今井兼平の行方が気になったので、ふり返られたところを、かぶとの内側を、三浦の石田次郎為久が追いかけて、弓をよくひきしほり、びゅつと射た。致命傷で、かぶとの前部を馬の頭に押しあてたまま、うつぶせになられたところに、石田の家来二人が駆けつけて、ついに木曾殿の首を取ってしまったのだ。

『平家物語』関係年表

保元元(一〇五〇)	保元の乱。平清盛・源義朝ら崇徳上皇軍を破る
平治元(一〇五九)	平治の乱。平清盛ら、源義朝の軍を破る
仁安二(一一〇七)	清盛、従一位太政大臣になる
安元三(一一一七)	安元の大火
治承四(一一一八)	宇治で、源頼政敗死
養和元(一一八一)	福原へ遷都。後鳥羽院誕生
寿永二(一一三三)	源頼朝・木曾義仲、清盛、没。このころ大飢饉
三(一一三四)	平家、都落ち。木曾義仲、入京
四(一一三五)	宇治川の戦。義仲、義経に敗れて敗死。一の谷の戦
文治二(一一八六)	壇の浦の戦。平家滅亡
四(一一八六)	後白河法皇、大原寂光院に建礼門院を訪ねる(大原御幸)
五(一一八七)	『千載和歌集』(後成)成立
建久三(一一九〇)	源義経、奥州衣川で敗死
元久二(一二〇五)	源頼朝、征夷大將軍となる
建暦二(一二三二)	『新古今集』成立
三(一二三三)	『方丈記』(鴨長明)成立
承久二(一二三〇)	『金槐集』(源実朝)成立
仁治元(一二四〇)	このころ、「愚管抄」成立 このころ「保元物語」「平治物語」「平家物語」の原型成立



平清盛(天子撰関御影) 『平家物語』前半の中心人物。

参考 『平家物語』の成立

この行長入道(信濃前司行長)、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門(比叡山延暦寺)のこゝとをことにゆゆしく(力ヲ入レテ)書けり。九郎判官(義経)の事は詳しく知りて書きのせたり。(中略)武士の事、弓馬のわざは、生仏、東国の者に、武士に問ひ聞きて書かせり。かの生仏が生まれつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。(兼好「徒然草」)

木曾義仲の死

木曾と申す武者、死に待りにけりな。木曾人は海のいかりをしづめかねて死出の山にも入りにけるかな。(西行「閑書集」)

語注

*無常観 万物は常に変化し、永久不變のものはないという仏教の考え方。とりわけ、人の死、恋人との離別、建物の荒廃などが人々に無常を強く意識させた。